

ニジェール支所便り

 2020年2月号

【編集長】小畑支所長 【編集担当】佐々木企画調査員

Tel: (227) 2073 5569 Fax: (227) 2073 2985 E-mail: ni_oso_rep@jica.go.jp

★ニジェール支所便りが JICA ニジェール支所の HP でも閲覧できるようになりました！懐かしのバックナンバーにもここからアクセスできます!! ⇒ <https://www.jica.go.jp/niger/office/others/newsletter/index.html>

今月のトピック



- 支所長のつぶやき ～サハルの平和のために！～
- 久々シリーズ: 日本からの便り～ニジェール ABE イニ生の今～
- 1月の支所の活動紹介 ～帰国研修員マハディ・ナナ・アイシャさんの活動～
- プロジェクト・専門家等の活動の進捗状況紹介
～みんなの学校: 住民参加を通じた教育開発プロジェクト・フェーズ 2～
～PASVA: 農業普及システム改善プロジェクト～
- 新シリーズ ニジェール隊員 OV からの便り
- ニジェールにおける活動紹介
～ニジェールでゴミを集める日本人 第 26 話 -小さな紙切れと謎の5つの数字～
- 巻末連載企画！OD のいちおし

支所長のつぶやき ～サハルの平和のために！～

年末から健康管理休暇で一時帰国しておりました。

生ガキ、刺身を毎日のように食べている私にカミさんがあきれている。

(ニアメに残っていた佐々木さん、大出さん、すみませんが、おいしかったです。)

健康診断では腹囲が 89cm。「ヤバい」ので立川の昭和記念公園でハーフマラソンを走った。当日はなんと雪。手袋の手がかじかむ中、完走はできたものの惨憺たる記録だったので伏せます。

そんなことをしていたら、12月29日にアガデスでマラソン大会が開催されたことを知った。Le Monde の記事によると、ニジェールでは初めてのフルマラソンとのこと。しかもアガデスとは！朝 7:30 スタートでフルには 20 数人が参加。ハーフ、10km、ジュニア、障害者の部には 800 人！トーゴ、ベナン、コートジボワール、モロッコ、フランスからも参加があったそう。気温は日陰で 28℃！！日向は一体何度あったのか！！

ビックリマークだらけになるが、この歳になって走り始めてフルマラソンを走ることがどんなに大変な行為であるか少しは知っている。しかもそこは砂漠である。

大会のスローガンは「**Courir pour la paix au Sahel**」！（サハルの平和のために走ろう！）

軍がコース両側を幅広く警備するなかランナーは気の遠くなるような道を走る。

ニジェールでは 12 月 10 日、マリ国境を越えてきたジハーディスト集団が軍キャンプを襲撃し 71 名の兵士が死亡、1 月 9 日にはさらに多くの犠牲者を出す事件が発生し、国は喪に服した。

「マラソンを通じいつの日も人を快く迎えるアガデスのイメージを伝えたい。これは私流のジハーディストへの抵抗だ」とトアレグ人の主催者。

人はいろいろなことを考えながら走るようだが、好きな本「走ることに語るときに僕の語ること」(村上春樹)に、レース中自らを叱咤激励するため Pain is inevitable. Suffering is optional. と頭の中で反芻しているランナーの話がある。「きつい」のは避けようのない事実だが、「もう駄目」かどうかはあくまで本人の裁量。

アガデスで優勝したのはニジェール人のラベ・ハサウ、記録 2 時間 50 分 22 秒。女性ではベナン人のジェリク・ベンティユ 3 時間 5

分 28 秒。拍手！！彼らは何を考えながら走ったのだろう。主催者、参加者の勇気と頑張りを称えたい。
テロとの闘いに負けるなニジェール！

久々シリーズ: 日本からの便り ~ニジェール ABE イニ生の今~



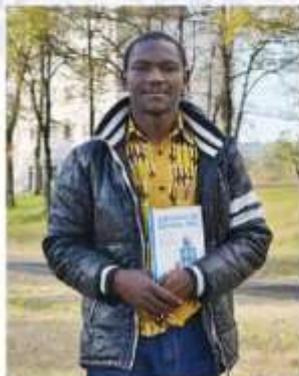
2018年8月を最後に、すっかり音沙汰をなくしていたこのコーナーですが、もちろん日本で頑張っているニジェール人 ABE イニ生がいなくなったわけではありません。2020年1月現在、左の地図にあるように4名のニジェール人が勉学、もしくはインターンシップに励んでいます。そんな折も折、新潟の国際大学で学ぶムタリさんから嬉しい便りが届きました。ムタリさんが暮らす新潟県南魚沼市の市報の「お国自慢コーナー」への投稿記事です。この記事から、祖国ニジェールへの愛情はもとより、現在ムタリさんが暮らす南魚沼市への思いも伝わってきますね。

実はムタリさん、昨年末2週間ほど自身の修士研究の調査でニジェールに里帰りされていて、支所にも立ち寄ってくれました(写真1)。その際も、日本人や、日本社会・文化の素晴らしさについて触れ、また、課題が山積するニジェールの現状に強い憤りを覚えていること、そして何とかその現状を変えていきたいという強い意気込みを語ってくれました。

国際大学留学生 お国自慢コーナー ~boast of my country~

シリーズ
第81回

ニジェール共和国 ヌフ マケリ ダウェイウェ ムタリさん



私の国はこんなところ

ニジェールは西アフリカの内陸国で、サヘル(サハラ砂漠南縁部の半乾燥地域内にある諸国)の1つです。サヘル人と呼ばれ、団結力と勇気があります。そしてサヘル文化と伝統の発祥地です。また、世界で最も若者の割合が多い国です。首都はニアメで、美しい街です。アガデス、ディアファ、ドッソ、マラディ、ニアメ、タワア、ティラベリ、ザンデールの8つの地域があり、それぞれ独自の文化と伝統があります。例えば、ティラベリを訪れると、カバやキリン、広大な川などを見ることができます。



南魚沼市に住んで感じたこと

私は日本に来てから東京・京都・長岡・八日市を訪れましたが、南魚沼市での生活が一番好きです。来日前に観光工芸省で働いていたこともあり、いつも自然と触れ合っていたいからです。ここで自分自身と向き合うことができることは夢のようです。

南魚沼の伝統的なおもてなしは、独特で親切だと思います。彼らは冬が長いにも関わらず、愛情を持って真剣に農業に取り組んでいます。南魚沼は静かで清潔な街なので、勉強するのに最適な街です。

ニジェール共和国

公用語	フランス語
首都	ニアメ
面積	1,267,000 km ² (21位)
人口	2,148,000人
GDP (PPP)	101 億ドル (132位)
通貨	CFAフラン (XOF)

※GDPは国内総生産のことで、購買力平価説 (PPP) により算出した数値です



写真1 祖国への熱い思いを語るムタリさん

市報にもあるように、ムタリさんの配属先は観光工芸省です。彼の調査は、2年に一度ニアメで開催される女性のための工芸品国際見本市についてで、それに関わる様々なアクター（主催者、出展者、来場者）への聞き取り調査を2回の渡航に分けて実施していました（今回が2回目）。なぜこのような調査をしようと決めたのか、彼の答えは明快でした。今年（2019年）で11回を数えるのに、開始当初からなら改善が見られないから、という理由です。お隣ブルキナファソの工芸品展（SIAO）は、ニジェールの見本市よりも後に始まったにも関わらず、国際的にも名が知られ、内外から多くの観光客を集める一大イベントとなっています。一方ニジェールは、その準備や段取り、運営... どれをとっても課題だらけで、回を追うごとに改善するどころか、むしろ状況は悪化していると嘆いていました。

ムタリさんの調査が、その改善の一助となり、来年開催されるであろう第12回目の見本市が、彼のイニシアチブによって大きく改善することを祈っています。残りの日本滞在中も、引き続き頑張ってください！

1月の支所の活動紹介

【帰国研修員マハディ・ナナ・アイシャさんの活動】



研修初日。対象校（3校）の教員が一堂に会す。手前ブルーのヒジャブの方がマハディさん

帰国研修員のナナ・アイシャさんと聞いて、「あっ、その名前、どこかで聞いたことがある！」と思われた方は、かなりの『支所便り』ツウですね。ナナ・アイシャさんといえば、一昨年9月～10月に中部センターで実施された課題別研修「学校保健」に参加された、保健省・学校保健のフォーカルポイントです¹。研修中も非常に熱心に様々な課題に取り組み、帰国後も積極的に自身のアクションプランを実現させていきました。



初めての視力検査に当惑気味の生徒さん。後方の先生方も心配そうに見守っていました。

今回は、そのメインの活動でもある、ニアメ市内3校における「児童の視力に障害・不調の予防」の教員向け研修に、NSハマさんと視察してきました。研修初日、研修会場を覗くと、すでに対象校の教員（ほとんどが女性！）がすでに着席し、研修の開始を待ちわびていました。開会の挨拶は、保健省幹部から述べられ、今回の研修の企画立案を担ったナナ・アイシャさんを称えと共に、会場に集った教員の方々にも激励のメッセージを送りました。その後、講師のメダング医師より視覚についての基本知識や、児童の視覚についての危険信号やその原因、放置することによるリスク等について述べられました。2日目の講義・実習を経ていよいよ研修最終日は、学校における視力

測定です。先生たちも不慣れな様子が伺えましたが、検査される生徒もまた生まれて初めての経験に、当惑気味。それを後ろで見守る他の先生たちも、あーでもない、こーでもない、思い思いの意見を言い合い、実に賑やかな検査風景でした。これらの生徒の中でも印象に残ったのは、高学年と思われる背の高い女の子で、2段目の大きな文字を見るのも辛そうに目を細めていました。「彼女は背が高いから、これまでずっと後ろの席に座らされてきたんだろう。こういう生徒こそ、逆に前に座らせる配慮が必要なのに」と、隣でハマさんが呟きました。この



研修3日目。実際に学校で視力検査を試みる先生。

研修で、視覚に問題を抱える生徒の負担が少しでも軽減されますように...

¹ 詳しくは、『支所便り』2018年12月号 (<https://www.jica.go.jp/niger/office/others/newsletter/ku57pq000020tcwd-att/201812.pdf>) をご参照ください。

プロジェクト・専門家等の活動の進捗状況紹介

■■ みんなの学校：住民参加を通じた教育開発プロジェクト・フェーズ 2 ■■■

『みんなの学校：住民参加による教育開発プロジェクトフェーズ 2』では、初等教育分野と中等教育分野、二つの分野にて活動しています。初等教育分野においては、住民支援の校外学習に効果的なツールを導入することですべての児童の“読み書き”と“計算”の基礎学力改善を目指す『質のミニマムパッケージ』の開発と普及に取り組み、中等教育分野においては、アクセス、格差解消、教育の質の改善など、様々な教育開発課題の改善に貢献する“機能する”学校運営委員会(COGES)モデルの全国普及を進めています。

「初等教育分野」では、昨年度 2019 年 11 月に、全国的な女子就学促進のため、みんなの学校「フォーラムアプローチ」による全国 8 州での「州教育フォーラム」開催を UNICEF との連携により共同で支援しました。そして現在、全国 8 州のコミュニティメンバー、保護者、教員、教育行政官、市長や知事、村長や宗教指導者など、学校にかかわる現場アクターを総動員して実施した「女子就学促進」のための州教育フォーラムと、その後の活動の全国的な結果が回収されています。

この 8 州にまたがり実施した州教育フォーラムでは、小学校 1 年生の入学数増加と女子児童の入学促進(女子の割合増加)を目標に取り組んできました。達成目標は州ごとに定められましたが、全国的な目標値としては、「入学数 537,200 名、内、女子児童の割合 46.5%」であった 2018 年を基準値とし、入学児童数の 20%増(10 万名強の増加)とその中で女子児童の割合を 47.5%まで上げることを目標として掲げました。この全国目標をベースに、全国 8 州でのフォーラムが開催され、各州フォーラムを受けて、全国各地で様々な現場アクターの集会やキャンペーン、7~9 歳児童の入学登録にかかるコミュニティへの働きかけと共に、新入生受け入れ態勢の整備が進められ、昨年度 2019 年 12 月末日まで新入生の入学受け入れが行われました。

果たしてその結果は—。まだ最終数値ではないものの、入学数はおおよそ 30%増となる約 70 万名にまで達し、そのうちの女子の割合も目標値である 47.5%に至ったことが確認されています。8 州ほぼすべてがフォーラム目標に達するか、それ以上の成果を上げています。この成果は、まさに、みんなの学校開発のアプローチの有効性と共に、地域教育開発にかかるコミュニティ参加と関係者連携の効果と可能性を示しています。

そして今、プロジェクトでは、初等教育での成果を受け、この全国的なコミュニティ参加の就学促進ムーブメントを中等教育に広げようと取り組みを開始しました。今年 2~3 月には、再び UNICEF との連携により、初等・中等両教育分野にまたがる第 2 回全国 8 州初等・中等教育フォーラムを開催予定です。今回の第 1 回州教育フォーラムを通して小学校に入った子どもたちや、初等教育を経て中学校に入った子どもたちが、ドロップアウトすることなく、きちんと継続して教育を受けられるように、全国に広がる初等 CGDES と中等 COGES のネットワークを駆使して、初等教育・中等教育の現場アクターによるシナジー活動を生み出していきます。



写真左：授業の様子—女の子も男の子も積極的に手を挙げてます。

(EPT 専門家 影山晃子)

■■ PASVA:農業普及システム改善プロジェクト ■■■

1月28日(火)朝6時、ニアメのGoogle天気予報は、今日も「ちり埃曇り」ってなんて天気予報だと、毎朝のようにツッコミを入れながら、バタバタと準備をします。今日は SHEP アプローチにとって重要な「お見合いフォーラム」開催の日です。

ニアメの農業事務所の農業局長(DRA)を中心に昨年12月から準備を進めてきた、参加者100名ほどを予定した一大イベントです。

SHEP アプローチでは、農家と園芸産業関係者(野菜買取り業者、野菜種子・苗販売業者、農業資材業者、マイクロファイナンス機関など)が、「ビ



課題分析からアクションプランを作成するの農家

(課題分析を基にお見合いフォーラムで話を聞く関係者と質問事項を記載したもの)を作成する一連のセッションをお見合フォーラムの前に終えておくことで、農家が抱える問題(特に市場・マーケティングにかかる問題)を農家自身が分析・明確にしておきます。

お見合いフォーラムの会場は、Palais du 29 juillet(通称Stade)。ニジェールに長くいる日本人の方は聞いたことがあると思いますが、大きな室内運動施設です。バスケットボールコートを貸切りました。この模様は、ニジェールのナショナルテレビ Tele Sahel の20時半からのニュースで放送されま



種子業者に質問する農家。右手の女性が普及員で、普及員は、農家がコミュニケーション計画に沿って質問できるようにサポート役に徹します



JICA ニジェール支所小畑支所長に挨拶頂きました

ジネスとしての農業」

の知識とネットワークを拡大するための出会いの場です²。また PASVA では、農家自身では解決が難しい問題の解決手段を提供する場としても活用しています。

これらの目的を達成するための事前準備も大切です。例えば、園芸関係者と農家組織のそれぞれのプロフィールを紹介するハンドアウトを全参加者に配布し、事前に参加者の情報を入手できるように準備しておきます。例えば、農民組織の情報のプロフィールには、構成人数、活動地域、現在の栽培品目、収穫期、収量を簡潔にまとめています。

また①課題分析、②アクションプランの作成、③コミュニケーション計画



24日(金)午後1時にDRAがバンドロールを注文してないことが判明し、急いで注文した

した。

8時半から予定していたスタートが農業省次官補佐のご到着を待って10時半になる、声をかけた商人が来ない、、、(最終的には10名参加いただきました)、会場のセッティング変更手伝ってくれ〜(汗)など、運営面では改善点がありましたが、ニジェール側にとっても、プロジェクトにとっても学ぶことが多いフォーラムでした。普及員に対しては、前日1月27日(月)に2時間ほど打合せをした成果か、園芸産業民間関係者22名(野菜買取り業者10名、マイクロファイナンス機関2名、農業資材業者10名)の中から、農家が質問したい業者を上手に選定し、質問中は書記に徹する³など、上手くファシリテートできていました。

² https://www.jica.go.jp/publication/pamph/issues/ku57pq00002izsm8-att/japanbrand_08.pdf

³ 非識字者が多いため、農家組織の書記もノートを取ることが難しいケースも多い

特にマイクロファイナンス機関への農家の関心が高く、女性農家から「マイクロファイナンスからお金を借りるのは大変という良くないイメージがあったが、今回説明を聞いて、他のグループメンバーとマイクロファイナンスを利用してみようか相談してみたいと思う」という声が聞かれました。

また参加した種子業者からは、「このようなフォーラムに始めて参加したが、大変興味深く、農家にとっても重要なフォーラムだと思う。このフォーラムに参加した農家と電話番号を交換し、新たな顧客を獲得できるチャンスをもたらした。その後、実際に農家組織に販売しに行きたいと思っている」という声が聞かれました。

(PASVA 専門家 小川奈穂子)

新シリーズ ニジェル隊員 OV からの便り

久方ぶりのこのコーナー！『原稿不足で、ついにフェードアウトか...』と思われた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。原稿不足の状況は相変わらずですが、細々と筆者探しは続けておりますのでご安心を！そして今回は、年末、私自身に宛てられた温かいお便りの一部を、筆者さまの許可を頂いてご紹介させて頂きたいと思います。今回お手紙の掲載にご快諾頂いた救世主✦西脇由華さん(17-1 次隊:トロディ・保健師)、どうもありがとうございました！！

メリークリスマス、そして新年おめでとうございます。

～中略～

さて、今回旅行先を変更しました。

私はニジェルでもトロディに行きたい、帰りたいのです。元配属先へのカドー（お土産）も考え、下調べもしておりました。规则的にはトロディには行けませんが、何とか行く気でもありました。しかし、職場の信用できる人に相談したところ、今は行くべきではないと助言されました。

～中略～

そこから私の迷走が始まり、ニアメだけ訪問、もしくは今回はニジェル訪問を断念する、という考えが行ったり来たりしました。迷った結果、トロディにも行ける時期になるまで待とうと決めました。おそらくニジェル人にとっては、今もそう危険な状態ではないのでしょうか。トロディは泥棒もいない町でしたから。外国人にも安全と言われるようになるまで待ちましょう。

とはいえトロディが気になっています。帰国してしばらくはGoogle マップで航空写真を見ることができたのですよ。私の住んでいた家のトタンの屋根さえ見ることができました。でも、いつ頃からか忘れましたが、トロディ（Torodi）という地名さえ出てこなくなり、航空写真も原っぱみたいな写真になって寂しくなりました。

さて、私が隊員だった頃（2005年ごろ）JICAの安全担当だったムーサ氏はまだつながりがありますか？トロディの市長と警察学校で一緒だったらしく、友人だそうです。トロディ市長の第2夫人のファティマタが私の家の隣に住んでいて、市長夫婦にはお世話になりました。なんでムーサと市長が知り合いとわかったかという、うちのガル（ガルディアンの略。警備員のこと）が第2夫人のメイドさん（人妻）と恋愛事件を起こし、バトロン（雇用主）である私も頭を抱える問題を起こしてくれたせいでした。この時JICAを代表して市長と話し合い、問題を解決してくれたのがムーサでした（この話は今度会った時、また詳しく話しましょうね）。それで、ムーサと市長が今も連絡が取れるのなら、私がファティマタと話をしたがっていると伝えてほしいのです。

もし、ムーサに会ったら一度頼んでもらえないでしょうか？そして、第1ガルは不祥事で解雇となり、第2ガルが市長推薦の「ムーサ」というガルディアンでした。この第2ガル・ムーサ家族もどうしているか気になっています。

もし、またファティマタとガル・ムーサ家族とまた連絡が取れたらうれしいです。
今度帰国したら会いましょう！



西脇 由華

ニジェールにおける活動紹介 ～ニジェールでゴミを集める日本人 -小さな紙切れと謎の5つの数字～

支所便り7月号(2016)から不定期でお届けしている、京都大学アフリカ地域研究資料センター・大山修一准教授の～ニジェールでゴミを集める日本人～シリーズ第26話。今回は、ニジェール人男性が興じる競馬(PMU)について執筆頂きました。

アフリカで、人気のあるスポーツといえば、サッカーが定番である。ニアメ市内の住宅地で、少年たちが夕方に砂ぼこりをあげながら、サッカーに興じているのは、よく見る風景である。ニジェールでは頻発するテロや犯罪などが叫ばれるなか、こうした光景は平和で、ほほえましい。

ニジェールで人気があるのは、相撲。ハウサ語でココアというが、ドツソやタウア、マラディ、ザンデルなど、各都市の名声をかけ、力士が登場する。優勝者には、多額の賞金も出る。このニジェール相撲については、しばしばニジェール支所便りで紹介されてきた。人びとは携帯電話やスマートフォンにビデオを保存し、2人の男が激闘を繰り広げているのを見て、相撲の観戦を楽しんでいる。

もうひとつ、人気のスポーツがある。PMU Niger。ニアメをはじめ、どこの町にでも茶色のブースや店舗があり、午後には閑散としているイメージもあるが、午前中には人盛りがすごい。PMUはフランス語だろうとは思っていたが、恥ずかしながら、この記事を書くまで Pari Mutuel Urbain (パリ場外馬券発売公社)の略だということを知らなかった。そう、競馬である。こんなところでも、ニジェールが改めてフランス植民地だったことを思い知らされるのである。PMUはセネガルやトーゴなど仏語圏西アフリカにネットワークがある。

余談になるが、わたしが調査をつづける村の村長の敷地には、かつて、メスのウマがいた。村長が町へ出たり、近隣村を訪問するときには、このメス・ウマに乗って出かけた。わたしの調査する村の名称は、3本足のウマが平穩に生きることができるという意味だと村長から聞いた。それほど豊かな村だということか、あるいは、豊かな村であって欲しいという願望が込められていたのか、現在の村びとは村名の由来を知らないため、今になると知る由もない。

大切に飼われていたが、飼料が乏しかったせいか、このメス・ウマはいつも痩せていた。小学校の校長は近隣の町に住み、2000年か2003年ころまで、毎朝、自分のウマに乗って、村の小学校まで通っていた。校長が日中、仕事をしているあいだ、ウマは校庭で草を食べ、木陰で休み、そして夕方には校長を乗せて町へ帰って



ニアメ市内のサッカー少年



わたしが寝泊まりしていた村長宅の敷地にはメス・ウマがいた。

行った。2005年ころだったろうか、村長宅では家族の食料が不足し、多額の現金が必要となり、ウマは売りに出された。それ以来、村長宅だけでなく、村にはウマはいなくなってしまった。いつしかウマの役目はバイクに変わり、校長先生はバイクで小学校へ通うようになり、村長は年老いて、歩くことができず、遠出できなくなった。

ニアメ市内の東側には大きな競馬場があり、それほど大きな観客席ではないが、砂地のダートで、競走馬が夕方に練習をしているのを見たことがある。しかし、このPMU Nigerの店舗やブースが馬券を売っているのは、ニアメの競馬ではない。パリをはじめとする、フランス国内の競馬である。村にウマはいなくなったが、いまは、遠い旧宗主国——フランスの競馬がニジェールの人びとを熱中させている。むろん、フランスで馬が走っているところを村びとが見ることはない。

夜になると、村の男性たちは懐中電灯を片手に1枚のA4用紙をにらんでいる。この紙には、翌日の出走馬が書かれている。出走馬は16頭で、各ウマの名前と体重、過去3レースの着順、性別、年齢、騎手と調教師、オーナーの氏名、獲得賞金、そしてオッズが書かれている。各出走馬の寸評も書かれている。裏を見れば、専門家の予想が書かれており、予想される払戻金も書かれてある。すべて、フランス語であるが、この金額を見れば期待がかきたえられる。村びとの多くはまったくフランス語を理解できないが、毎日、お金を賭けつづけている。ときに出走の取り消しがあるが、取り消し馬に賭けていた場合には、もちろん掛け金は返金される。

一口の賭け金は100フラン（20円）である。賭け方は3連単と3連複、4連単、4連複、5連単、5連複である。なぜか、ほぼすべての村びとたちは5連複を賭けている。つまり、着順を気にせず、5着までに入るウマの番号を予想するのである。村の男性には、毎日、「1, 2, 3, 4, 5番」の5頭を賭けつづける人もいる。それが的中することはないのだが、本人いわく、近い結果になるときがあるそうだ。フランスでは毎日、一日に8レースが開催されているが、ニジェールで賭けることができるのは1レースのみで、12時50分に出走するレースである。ニジェールでは、10分まえの12時40分に馬券の購入が締め切られる。

夜のあいだに、男性たちは悩みに悩んだすえ、紙きれに5つの数字を書くと同時に、値段を書き込む。バイクをもつ友人に、その紙きれと現金を託す。翌朝、バイクは町へ行き、馬券を購入し、村に戻ってきて依頼主に手渡す。きっと、こんな村はほかにもあるだろうし、町の住人にも愛好者は多いのだろう。ニジェールでPMUのブースや店舗に男性たちが殺到するのは午前中で、午後になると閑散となる。レースは12時50分に始まり、5分以内には着順が判明する。スマートフォンを持っていれば、インターネットで着順の情報を入手できるが、正式な情報は夕方に人づてに知らされる。その情報を入手すると、「おいしい!」とか、「成功に近い。」「あー。」



5つの数字を考える姿は、真剣そのものである。

などと言ったのち、ため息がもれる。バイクの運転手はすでに、翌日の出走表をPMUより持ち帰っている。男性たちは出走表を入手し、ふたたび夜に悩みつづけ、5つの数字をひねり出すのである。

88世帯ほどの小さな村で、どれくらい的人数が馬券を購入しているのか、ある日、調べてみた。すべて男性で、女性はひとりもいない。その数、44人。賭け金がかつとも少ない人は200フラン、かつとも多い人は1600フランだった。だいたい300~500フランの賭け金である。総額は18,000フランにもなったが、この翌日、村には「当たった」という男性はいなかった。貧しい村から1日に合計18,000フランもの現金が出ていき、それが連日、続いていることに心のなかで悲しい気持ちになった。毎日、多くの馬券とA4の出走表が捨てられ、わたしは村でそれを拾い集めた。馬券は、レース後には期待と熱狂が冷めた「遺物」となる。わたしがそんな紙きれを集めていると知って、村びとが手渡ししてくれるようになった。

小さな金額が当たったとき、男性はうれしくなって周囲に自慢するが、大金が当たったときには黙りこくりに、けっして周囲には言わないという。しかし、男性が理由もなく、急に市場で屋根用のトタンや中古のバイク、ウシなどを購入すると、競馬で的中したことを周囲は疑うのだという。村で、かつとも大きい払戻金は1,676,000フランと言われる。日本円にすると、約33万5000円である。20円が33万5000円になったのだから、その喜びは半端なかったようである。この男性は食料と中古バイクを購入し、父母の生活支援をし、トタン屋根の家をつくり、しばらくして第2夫人を迎え入れた。本人はこのときの快感を忘れることができず、毎晩、出走表をにらみ、500~1000フランを賭けつづけている。「賭け事にはまるのは、ばかだと」と一蹴する人も少なくないが、近隣の友人の成功談を聞くと、男性たちはじっとしていられない。果たして、5つの数字は明日の成功に結びつくのだろうか。



A4用紙の出走表と紙きれ、そして購入された5連複の馬券

ニジェールで人気のスポーツといえば、直ちに思い浮かぶのが相撲ですが、これに引けを取らないほどニジェールの男性陣を熱狂させているもう一つの競技があったとは...といっても、それをじかに観て楽しむ相撲とは、ちょっと趣を異にしていますね。むしろ、我々日本人が一縷の望みを掛けて購入する宝くじとよく似ています。小さな金額が当たったときは周囲に自慢するが、大金が当たったときには黙りこくる、という行動心理もしく、万国共通、人間考えることは皆同じなんだなあ、と改めて思いました。

この貧しいニジェールの農村で、毎日 18,000FCFA もの現金が馬券購入に消えているという事実に、私も少なからぬショックを受けましたが、貧しいからこそ、そこから抜け出したい、という願望が強く、それが彼らを PMU に連日向かわせているのではないかと想像します。大金を当てた後のお金の使い道について、食料、中古バイク、両親の生活支援、そしてトタン屋根の家、までは、『うん、うん、偉い！』と感心しましたが、最後の二人目の奥さん、にはがっくり、というか、まあ、ニジェール人男性らしいオチだなあ、とひとり苦笑い。私はむしろ、これを寛容に見守る(もしくは黙認する)、ニジェール人母ちゃんにエールを送りたいです(Y.S)。



巻末連載企画！ **おDのいちおし**

1月某日、ニジェール支所から徒歩で数分の雑貨店が全焼となる火事が発生しました。

原因は、この日の夜に起きた停電の後、電気が戻ってくる際に高電圧が発生して火花が上がり、店内にあったガス瓶に引火したのではないかとされています。夜は無人になる店なので、幸い被害者はありませんでした。

3月からの暑い時期は特に停電が多くなります。毎日のことずつい面倒になりがちですが、就寝前や出かける際は電気のプラグを抜いたり、タコ足配線にスイッチがあるのであればそれを切ったり、日ごろから習慣づけておくことが大切です。

クールな街づくりを目指す Niamey Nyala の影響でしょうか。このお店は既にきれいに片づけられ、新たな店として復活すべく建て替えやペンキ塗りが始まっています。支所職員もよく利用するこのお店、一日も早い再開が待ち望まれます。



(企画調査員 大出理恵)